

禅僧とベネディクト会修道士 ——非利己的世界観の神話^{ミユトス}を形成する模範——

Morris J. Augustine

序

僧(monk)とは、ある宗教あるいは宗派によって定められた行動の規範と師に厳格に従い、通常共同生活を営む独身の男女の修行者のことである。

この一般的定義によると、仏教やキリスト教の僧だけでなく、ヒンズー教、ユダヤ教、イスラム教の僧がいたし、今もいることになる。歴史に現われたこれらの修行者たちの生活様式と修行は互いに大いに異なっているが、核となるべき共通の特徴も持っている。独身、清貧、師と行動規範への服従、最小限の衣食住、冥想、祈り、唱え、儀式に費やされる多くの時間がそれである。

本稿は社会科学の現象学的方法によって、禅僧とベネディクト会修道士の生活と修行を比較しつつ、僧院生活のダイナミックスを調べようとするものである。

このような広い意味において僧を見ると、生活様式と修行に大きな多様性が見られる。特定の修行集団の修行と生活様式は、世界の究極の本質とそれへの人間のかかわりについてのそれぞれの教義から直接出てくるのであるということに注意するのが、この研究にとって特に重要なことである。世界の究極の本質についての考え方が異なる故に、これまでに現われた多くの僧院の伝統が大きく異なっていたのである。この研究の中心的目的は、全く異なった文化的、宗教的、文明的背景を持つ修行者たち間に見られる類似性の人間学的源泉を求めることである。

僧の修行と生活様式は彼の信念に直接依拠しているだけではない。僧院の伝統を持つ殆ど全ての宗教において僧は、その宗教が人間について、人間の倫理的義務について、そして「真に真なるもの」、即ち世界の究極的本質へのかかわりについて教えることを理想的に、「完全」に実現していると考えられている。かくして信者はその生活様式の許す範囲で僧の実践を模範として真似ようとする。こうして僧は世界観の神話(ミユトス)の形成者となる。というのは究極的真実への人間の理想的なかわり方について宗教が教えていることを、僧はその生活と修

行の中で完全に反映しているからである。彼の生活様式は、人間の本質についての信者の考え方を象徴し、具現し、正当化し、確立するのである。このようにして僧は世界観の神話（ミュトス）を形成する模範となるのである。各の僧が、その規範と師と宗教とが教えることを完全に実現するとは限らぬが、彼の生活と修行の基本は信者にとってのモデルである。

勿論、墮落した人間が他者の慈悲・慈愛に頼らずに自己を救おうとするのは、無駄で有害な試みであるとして、僧の修行に反対し、僧というものを持たぬ宗教の伝統もある。浄土系の仏教とプロテスタントの伝統がそれである。ここではそのような伝統が、今問題にするものに比べて、宗教として劣るというようなことを云うつもりはない。これらの伝統をここで直接とりあげるわけではないが、事実、同じ一般的結論がこれらの伝統にも、これから検討しようとするものにも妥当するのである。

以上のような考え方に基づいて、禅僧とベネディクト会修道士の生活と修行を取扱いたいと思う。本稿は二部に分かれる。第1部では、禅宗の雲水の生活と修行と、ヌルシアの聖ベネディクトの著した会則に従うトラピスト会士及び（黒い装束のためそう呼ばれる）黒いベネディクト会士の生活と修行とを詳しく比較して述べる。第2部では二つの僧院の伝統の間の類似性と相違を述べ、根底にある類似性の人間学的源泉を尋ねようとする。方法論としては、宗教の本質について米国、その他の国の宗教社会学者の多く、特に Alfred Schutz, Peter Berger, Robert Bellah, Clifford Geertz, Thomas Luckmann 等によって用いられている社会科学的概念を用いることになる¹。

第1部 禅僧とベネディクト会修道士の生活と修行

表を見ると（次頁参照）いくつかの興味深いことがわかる。まずすでに述べたように、僧たちの生活様式と修行は究極的リアリティについての考え方から直接出て来ているのである。この事実は表から明らかに見られる。雲水の修行の各側面は、禅宗の中心的な考え方に完全に依拠している。その考え方とは、真に存在するものはなにもなく、全ての現象は因縁によって仮りにあらわれているのであって、人間の苦しみは仮象への、とりわけ根本的に非実在的な我への執着の直接の結果であり、仏の法は言葉や經典によってではなく、心から心へと伝えられることによって最もよく伝えられるのであるという考え方である。雲水の修行の全て、特にその中心をなす毎日の長時間の坐禅は、リアリティの究極の本質についてのこのような考え方から直接出てきていることは明らかである。

禅僧の生活様式が確立されたのは5世紀から7世紀の中国にさかのぼる。それは上のような

(表) 禅寺の僧堂とベネディクト会修道院での生活と修行における類似した中心的要素

修行の種類	禅の雲水	ベネディクト会修道士
積極的修行。これらの修行は無私な態度、感情、行動、意識のあり方を生むように働く。		
冥想	坐禅。雲水の修行の中心。日に3～14時間。	イエス、神、その他について冥想。概念を用いぬ観照。
唱え	朝課。読経。その他の唱え。日に約2時間。	ミサなどにて聖句、祈禱の斉唱。日に3～5時間。
祈り	諸仏への讃歎と感謝。陀羅尼、回向など。	種々の祈りが修道士の修行の中心。聖歌での讃美と感謝。ミサその他。日に5時間。
勤め、儀式	朝課。文殊、いたてん等への讃歎と願い。辞儀、平身、その他。修行の中心的形態。	ミサ、日課 (Office)、 sacrament、辞儀、平身、その他。
意識の変化	種々の段階の三昧。生活の全てを坐禅にしようとする。極めて重要。	唱えと祈りが精神を自己意識なきところまで高める。観照が常に目標。極めて重要。
慈悲、慈愛	極めて重要。菩薩の徳の中心。	極めて重要。修道士の生活の主な目標はイエスと人間に対する完全な愛。
楽器の使用	リズムカルに楽器を鳴らすのはどこでも行われる。鐘は三昧への助けになると考えられる。	小さな鐘がミサ、日課、食事の時を告げる。 ミサ、晩禱でのオルガン。
聖典拝読	読経以外には特に勧められぬ。	聖書や精神を高める書を毎日勉強する。
師への従順	老師に毎日会う。その教えに頼るのが肝要。	聴罪師と指導者に頼るのが修行の中心的側面。
社会からの隔絶	僧堂での沈黙と精神の集中が重要。	世俗からの終生の隔絶と修道院の観照的雰囲気大切。
消極的修行。これらの修行は利己的、自己中心的な思考、態度、感情、行動、意識のあり方を抑え、弱めるように働く。		
食事	菜食。品数わずか、量ゆたか。	トラピスト会は菜食。粗食であるが、断食の時以外は量ゆたか。
衣服	目だつ象徴的な最小限の粗衣。	目だつ象徴的な最小限の粗衣。
住い	禅堂の極めて質素な部屋での共同生活。	簡素。時には共同の部屋で、たいていは個室。
個人的所有物	禅堂の棚に置けるだけの最小限のもの。	個人の所有物なし。使えるのもも最小限。
性	雲水のあいだは独身で禁欲。	終生の独身と禁欲を誓う。
言葉	禅堂、食堂では絶対の沈黙。常に沈黙をつづけようとする心掛け。	夕べの祈り後や礼拝堂、廊下での絶対の沈黙。
睡眠	最小限。6～7時間。ずっと少ないこともある。	最小限。8時間以下。
労働	作務。日に3～6時間。修行の一形態と見られる。	労働と祈りがモットー。自足が理想。修行の一形態と見られる。
服従	師と先輩への服従が厳しく義務づけられる。	強調され絶対的に実践される。
施しを乞うこと	週に数時間の托鉢が重要な修行と考えられる。	なし。ただイエスが必要なものを全て人に頼ったので事柄としては尊重される。
苦行	進んだ者以外には危険とされ、老師の指導の下に行われる。中庸が強調される。	進んだ者以外には危険とされ、師の同意の下に行われる。聖ベネディクトはなにごとにも中庸を強調した。

考え方が仏教の新しい宗派を生み出すようになった頃である。殆ど最初から禅僧たちはそうした教えを完全に実践しようと努め、すぐに禅僧たちのための規則ができあがった。

世界の究極的本質についてのベネディクト会修道士の考え方が、雲水のそれとは殆ど全ての点において完全に異なっているのは明らかである。彼らの生活様式も、リアリティの究極の本質についての考え方から直接出てきているのである。その源となる考え方とは、子を人間イエスとしてこの世に送った慈愛深い父であるところの、永遠にして全能なる神についてのカトリック教会の考え方である。そのイエスは、自己中心性を棄てイエスと同じように神と人間を愛すことによって神の超自然的生命にあずかる道を教えて人間を救ったのである。ベネディクト会修道士は完全であらうとするならば、持ちものを売って貧者に与えてついて来いという、福音書において金持ちの若者に与えられた完全のすすめに従うのが自分の生き方であるとみており、独身生活、個人的所有の放棄、神の意志への完全な服従、貧者への愛と奉仕、必要な最小限のものによる生活において、自分はイエスに従うのでありと考えている。

ベネディクト会修道院の生活様式もヌルシアの聖ベネディクトによって6世紀に形成された。彼はそれまで200年以上行われていた僧院の実践のうち最良のものを選び、短い会則 (*Rule for Monasteries*) を著したのである²。トラピスト会(シトー会)も黒いベネディクト会も今もまだその会則に従っている。前者の方がより厳密に文字通りにその会則に従う。この会則では、僧の生活と修行は、完全にイエスに従うための最高の方法であると見られている。その会則に定められた規則と修行は、全て聖ベネディクトが理解したイエスの教えから直接出ているのである。

このように全く異なった起源を持つにもかかわらず、禅僧とベネディクト会修道士の生活と修行には大きな共通性がある。その類似が特に明らかであり、我々の研究にとって重要であると思われる八つの側面を見てみよう。

- (1) 独身生活。どちらの僧も僧院での生活の間、完全な性的禁欲生活を送ることを誓う。事実どちらの僧も終生の独身を誓ったのであるが、明治時代になって禅僧は禅堂での修行の期間を経たのち妻帯することが許された。しかし妻帯してしまうと、もはや雲水とは考えられない。
- (2) 最小限の衣食住と所有物。どちらも粗食で、たいてい菜食であり、着換えは一、二着であり、合宿所のような部屋に共同で暮すか、家財道具のわずかしかない個室に暮している。どちらも個人の所有物は全然持たぬか、仕事に最低限必要な物しか持たぬ。
- (3) 沈黙。どちらも共同生活と仕事と人間関係に必要な最少限の言葉しか許されない。

(4) きまりと師への服従。どちらも戒律あるいは会則に自分の意志を厳格に従わせ、師の忠告と命令に従う。

上記の四つの共通点は衣食住その他の必要物を厳しく抑えるという意味において、消極的なものである。更に次のような積極的共通点もある。

(5) 勤め、儀式。どちらの僧も儀式、あるいは勤めに多くの時間を費やす。禅僧の場合、朝約1時間経典やその他のものを読み、唱え、作札やその他こまごまと定められたことを行なうという形をとる。ベネディクト会修道士の場合はミサ、教会での聖務日課、その他辞儀や十字を切ったり、ひざまずいたりするという形をとる。

(6) 祈り。どちらも、仏あるいは神への讃歎、感謝、願いの祈りをささげるのにかなりの時間を費やす。究極的なものについてのそれぞれの考え方によって、仏あるいは神への絶対的帰依と依存を祈りにおいて表明する。

(7) 唱え。どちらも教典や定型化された言葉を、たいてい何等かの伴奏つきで厳かに唱和する。

(8) 冥想。双方において、そのやりかたは大変異なっているが、どちらも精神を集中するために不動の姿勢をとる。どちらも概念的省察というかたちの冥想と概念によらぬ冥想を行う。後者の場合精神からは殆ど概念が消え、仏や神の概念まで消える。

これら四つの積極的共通点は、人間に同じ心理的結果を生むように思われる。即ち、特別な次元の自覚、あるいは非日常的な意識をよびおこす。この意識のあり方の一つのめだった共通性は自己中心的な意識が低下し、そのかわりに究極的實在についての特別な理解が注意の中心になるということである。

先の消極的修行もこれら積極的修行に対応する特徴を持つ。即ち、それらは食、性、所有に関する人間の本来的に自己中心的衝動と意識のありかたを抑えて、その価値を減じ、それらを最小限のものにしようとするのである。

表に出ている他の修行もすべて自己中心性を抑え弱めるか、あるいは無私なる感情、行動、態度、意識のあり方をよびおこし、それを強めるという働きをするので、上記の二つのカテゴリーのいずれかにおさまるのである。それ故禅僧とベネディクト会修道士との全ての共通点を上のように大きく二つの基本的カテゴリーに分けたのである。第2部ではこの現象の理由と考えられるものを論じてみる。

第2部 非利己的行動と意識の人間学的ダイナミックス

これらの類似性を説明するダイナミックスを——そしてこのダイナミックスはその本性において遺伝的でもあり、社会的でもあり、文化的なものでもあることは後にわかるのであるが——理解する第一歩は、すでに簡単に見たように、これらの類似性はいずれも私が無私なる態度、行動、感情、経験、意識のありかたと呼んだものを強化するという事実注目することである。

しかしそれは実践的にはどういうことを意味するのであろうか。僧が食、性、所有、攻撃、支配、自立などの本来自己中心的な衝動を弱め、抑える方法を見出さなければ、彼は僧であろうとする決意を長く持続出来ぬということ、それは意味しているのである。しかしここに積極的修行と呼んだものが、彼の態度、感情、意識の焦点を改めるかなり有効な方法となるのである。人間と世界の究極的な本質についての彼の宗教の教えを信ずる気持は、これらの修行によって身につくところの態度、感情、意識の次元により、大いに強められ固められるのである。そのことによって彼は更に一層厳しく修行するようになり、彼の生の焦点は自己中心性からぬげだし、思考、行動両面において、より無私なるあり方に向かうのである。

当然のことながら、遺伝による生物学的な自己中心的衝動が基本的に変るわけではない。しかしそれらには違った解釈が与えられ、それらは新しい方向に向けられる。僧が自己中心性へとかりたてられることは終生なくなることはない。しかし歴史があきらかに証明するように、このような宗教のダイナミックスは、僧の生活を基本的に変えるだけでなく、社会や文明全体に影響する力があるのである。というのは、社会や文明の構成員は僧の生活に模範を見出し、少なくともそのおおまかな基本線において、その模範に従うことができるからである。

厳しい坐禅の冥想によって達する三昧は、そうしたダイナミックスの適切な例となるであろう。坐禅は殆ど概念を用いることなく、しかも生起する全てに注意を鋭く向け、それを意識するような精神状態をつくりだす。僧が坐禅するのは仏教の世界観と信心の故である。そして僧が三昧にあって世界を見るとき意識の状態は、根源的究極的実在であると仏陀が教えたものにはほぼ相当する。すなわち、いかなる概念も事象も現われず、欲求も執着もなく、静寂が全てのものについての意識に浸透するような精神状態である。イエスの生と教えに示される愛によって変貌した人生の美しさを唱え、冥想するキリスト教の僧も正にこれに対応するものを経験するのである。

別な言いかたをすると、この二つの例のいずれにおいても、また僧院でのそれぞれの生活様

式の実践においても、唱え、祈り、勤め、冥想及び自己を抑える消極的修行によって養われた感情、行動、意識の状態は、それぞれの宗教の伝統が教える人間と世界の究極の本質についての概念に対応し、それを支える強めるように働く。このようにして禅僧やカトリックの修道士だけでなく全ての宗教は、世界の究極の本質についての概念を信者に与え、かつ、実際にその世界に入って生涯その中に生きつづける実践的、倫理的方法をも同時に与えるのである。世界観という概念的要素と、修行と生活様式という実践的要素の両者が互いに支え、強めあう。それらは、社会を構成する家族や、政治的、経済的、芸術的諸組織をつなぎおさめる安定した基盤を形成する。このように究極的・宗教的世界観の中におさめられて、これらは実在の最も広く深い究極の次元に合致するものと考えられ、正当化されるのである。

宗教的实践についてのこうした理論は、禅僧やキリスト教の修道士が何故かれらがやっているようなことを行うのかということの説明するのに大いに役立つ。しかしそれは禅僧とカトリックの修道士とは世界観が昼と夜ほど違うのに、何故両者の修行にこのように多くの類似性があるのかという我々の中心的疑問には助けを与えてくれない。この間に答えるには別の歩みが必要である。

David Hume, 特に Marx と Freud が書を著わして以来、個人としての人間の行動がいかに徹底的に自己中心的であるかということがますます明らかになってきた。Geertz から Habermas までの最近の社会科学では、これらの偉大な思想家たちが全く見逃した、人間の持つもう一つの面を探求しようとする傾向がでてきた。個人としての人間は利己的な存在ではあるが、単にそれだけの存在ではない。彼はまた仲間や社会に対して、ある程度無私なる態度を身につけねばならぬ社会的動物であり、さもなければ、社会全体のために利己的衝動を犠牲にし昇華できる構成員からなる社会によって、彼や彼の社会は必ず滅ぼされてしまうのである。Marx も Freud もこのような社会化、あるいは昇華が必要であることを認めた。しかし彼らのいずれも、過度で破壊的な自己中心的衝動と攻撃性を抑え、個人の意識を非利己的行動、態度、現実へと向けなおすのに、宗教体系が最も有効な手段の一つであったし、今もそうであることを理解しなかった。

Hume と Machiavelli は社会的・政治的次元での人間の消し去りえない利己心を示し、Marx と Freud は経済的次元と生物学的あるいは下意識の次元でのそれを示した。これら四人の偉大な思想家や同じような考え方をする思想家の業績は宗教的人間観と世界観が一般的に好まれぬようになったのを説明するには大いに役立つ。仏教、キリスト教、イスラム教等は、自我と利己心を完全に棄て、弥陀、神、あるいはアラールなどと合一する至福が人間の最終的に

達成すべきことであると教える。一方、近代の偉大な科学者や心理学者や哲学者は、人間は食物の摂取と性行為による生殖で自己を保存し、攻撃性と適者生存によって自己拡大へ向かうよう太古からの遺伝的衝動によってかりたてられる動物であると教えてきた。過去2世紀にわたってこれら二つの考え方は互いに相容れず矛盾すると大抵の人々によって考えられてきた。しかし人間の知識の徹底した象徴的・言語的本質への最近の洞察は、宗教的な形の思考と知識は科学のそれと矛盾するのではなく相補うものであるという考え方を強めている。

アメリカの著名な人類学者 Clifford Geertz によると、人間は無闇に仲間を殺すことに対して本能的抑制が働くように、攻撃的・自己中心的衝動が遺伝的資質によって制御されていない唯一の動物である。同様に人間は、少数の霊長目を除いて性的攻撃性が発情期によって影響されない唯一の動物である。

Geertz によると、人間はこうした遺伝的制御にとっかわる文化様式を発展させたのであり、宗教はその中心的なものの一つである。人間の宗教的象徴体系は、宇宙生成と物の内的本質についての象徴と物語から作られたものであり、人間が真に幸福になり、人間としての真の本性を実現しようとするならば、人間はそれにしたがって生きねばならぬと彼は言う。原始人も現代人もこうした象徴的手段によって自分の好む気分や態度や性向や感情を、社会の賢人たちがとらえた宇宙の究極の本質と合致するものとして、後の時代に伝えるのである。

自己中心的態度を抑え、利己心の少ない思考と行動を養うのに適した修行が僧の生活においていかに重視されているかをみると、禅僧とキリスト教の修道士の生活の類似性を生む人間共通の根拠の探求にとっての答えが見えることになる。

究極的実在についてのかれらの概念的教義や考え方は、それぞれ全く異なった象徴と物語に基づいているが、それらの教義や考え方は人間共通のダイナミックスによって形成されている。仏教とキリスト教の創始者や教祖たちは（時の試煉を経た世界の他の宗教の創始者たちも）かれらの社会の経験乏しく血気盛んな若者には容易に理解されなくても、究極的には人間と宇宙の本質からして、人間の自己中心的な衝動が厳しく抑制されるべきであり、その抑制が暴力や恐怖に基づくべきでないことを悟っていた。むしろ彼らの考え方は、利己心なき人間の善意という理想は単なる幻想的な夢ではなく、マルキストである哲学者の Ernst Bloch が言うように、そうした善意は人間の生活と幸福に絶対的に必要な「希望の原理」であるという認識に基づいていたというのが適切であるかもしれない。仏教やキリスト教やその他の宗教に見出される宇宙の究極の本質についての物語や教えの中心となる核心は、文字通りに解するよう意図されたものではない。宗教的真実とはそういうものではない。そうした教えや物語は神話（ミュ

トス)を形成するのである。即ちそれらはその本質上象徴的なものである。

禅僧やキリスト教の修道士の生活の基になっている宗教的真実を象徴的と呼ぶことは、宗教の教義を形成する神話や物語や他の教えが空虚な作りものであることを意味するのではない。もしそうだとすると我々が禅僧とベネディクト会士の修行の間に見た共通性には根拠がなくなってしまうであろう。そうではなくて、界世の究極の本質についての宗教の考えかたは真実なのである。それらは、詩や芸術が真実であるのと同じように、象徴的な意味において真実なのである。これは Schutz, Geertz, Bellah, Berger その他の人々が説く宗教の本質についての人間学的見方の中心となる考え方である。我々が論じてきた世界の究極の本質についての、神話(ミュトス)を形成する全く異なった見方のいずれも、いわば同じ普遍的宇宙像の太古の経験に基づいている。本論の中心点は、禅もカトリックも、当然他の宗教体系も、人間の自己中心的衝動を自由に振る舞わせることは、究極的には最も広い象徴的な意味における人間の本質に矛盾するものであるという太古の人間経験の枠の中で形成されたものであるということである。

どの社会の人間もみな同じ地球に住み、太陽と季節と誕生と死と苦と福の同じリズムを経験する。人間の知識は幾千年にわたる共通の経験を言語で表現することによって徐々に作りあげられてきたものであるということは、今日哲学の全ての主な学派によって認められている。宗教の知識は、「山」や「アミーバ」といったものについての直接的な「経験的」知識とは異なって、また近代科学が我々の注意の中心に置いた科学的実験の結果得られる知識とは異なって、ほぼ1世紀前にアメリカの哲学者 George Santayana がいった通り、詩や芸術の真理に近いものである。すなわち、「山」も象徴的に作られた言語的概念であり、人間の知識に蓄えられているが、究極的実在と人間の本質についての宗教的概念はもっと広い次元のものであり、—— Thomas Luckmann によると——人間経験の最も広い範囲の実在を象徴し総合するものである³。

勿論、この経験は各社会によって異なる。各社会の言語的象徴と物語と神話(ミュトス)形成の要素は、宗教的、神話的、詩的、文学的、宇宙論的要素から成り立つ独特の体系を形成し、それが構成員全体の共通の遺産となり、人は同一の言語を習得し、同じ環境で成年に至る過程においてその遺産をそれぞれうけつぐのである。それらすべての要素は「木」、「母」、「死」といった直接的言語象徴とは違った次元の言語象徴である。それらの要素はいわば社会の知識体系の一番端の層をなすものである。それらは宇宙経験と倫理経験の最も広い「究極的な」層である故に、それらは通常他の全ての知識体系を包み、「説明」するのである。少なくとも宗教

的共同体を構成する各集団の信者の心のなかにおいてはそうである。

従って禅僧もベネディクト会士も、社会の伝統的宗教的行動体系を典型的に表している。というのは、かれらの生活様式と修行は、人間と実在の究極的本質についての二つの典型的な象徴的宗教概念によってとらえられた理想的人間生活を、完全に具現しようとする努力に基づいているからである。更に、究極的実在についての象徴的に総合されたこれら二つの概念はどちらも、本来的には究極的実在の概念を具体化すべく、そしてその概念に、社会において最も大切にされた徳、態度、習慣、行動、感情、性向、意識の次元などを丁寧に織り込むべく、それぞれの宗教の創始者たちによって入念に考えだされたものなのである。社会において大切にされてたものとは、愛、思いやり、罪や過失を悔いる気持、神あるいは如来への感謝と讃美であり、また金、食、性、知識といったものを追求の中心とはせぬ態度等である。これらはそれぞれの宗教において決して同じであるというわけではない。実際それぞれの僧院において行われているところを見ると、それらは互いに大変異なっている。例えばベネディクト派においては、身を不動の状態にして精神を集中することがすすめられはするが、坐禅によく似たものは存在しないし、同様に禅僧はベネディクト会士のような意味において俗世界の安寧に関心を持つべしとはされていない。

とはいえ、その理由は大変異なっているも、彼等はよく似た生き方をしているのを我々は見てきた。それは簡単ではあるが、ここに述べようとしてきたように、人間の本性の然らしめるところである。人間は自己中心のあらざるをえず、あるいは食物その他の必要物が不足すれば死なねばならぬとはいえ、彼はたえず利己心を抑えるように努めねばならぬし、さもなくば社会における癌細胞のごとくに仲間から排斥されねばならぬ。禅僧とベネディクト会士は——そして彼等が実在の究極的本質に理想的に合致していると思う信者たちも——非利己の生きかたをするのである。というのはそのような生きかたとそれがよびおこす象徴的世界観は、単なる合理性を超えた、超越的な意味において真なるものであることを彼らは感じるからである。彼らは仏陀の法やキリストの福音のうちに神話（ミュトス）を形成する真理を聞くのである。彼らは自分の気持、行動、感情、意識の次元のうちに、彼らの宗教の創始者と幾百万の信者たちによって象徴的に、しかし「真実性をもって」総合された究極的実在を実現するために、あのような生きかたをし、あのような修行をするのである。多分それ故に、たいいていの文化は最大の詩人と最大の聖者を非常によく似たしかたで崇拜するのであろう。

註

1. Alfred Schutz, *Collected Papers, 1: The Problems of Social Reality*, The Hague: Martinus

Nijhof, 1973; Peter Berger and Thomas Luckmann, *The Social Construction of Reality: A Treatise on the Sociology of Knowledge*, Garden City, New York: Doubleday Anchor, 1967; Robert Bellah, *Beyond Belief: Essays on Religion in a Post-traditional World* (New York: Harper and Row, 1970) 及び Clifford Geertz, *Interpreting Culture*, Now York: Basic Books, 1973.

2. *St. Benedict's Rule for Monasteries*, Leonard Doyle, tr., Collegeville, Minesota: The Liturgical Press, 1948.
3. Peter Berger, *The Sacred Canopy* (Garden City, New York: Doubleday Anchor, 1967), 3-29.

(本稿は井上正名京都工芸繊維大学教授によって邦訳された。ここに記して感謝の意を表したい。)